

論文

中学校家庭科における保育体験学習の展望

—高知県中学校技術・家庭科研究大会 指導助言の立場から—

Prospect of Nursing Experience Learning in Home Economics Education at Junior High School
-From the Perspective of an Instructor in Kochi Junior High School Technology
and Home Economics Education Research Association -

森田 美佐 (高知大学教育学部)

MORITA Misa

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

This study is intended to consider the future action around the nursing experience learning in home economics at junior high school students from the perspective of an instructor in Kochi junior high school technology and home economics education research association in 2016.

This study showed that the positive effects of nursing experience learning by this association were to enhance the learning effect as teachers encouraged the simulated experience learning before those students visited the nursery school. They became less nervous by using the documents the students made after taking the nursing experience learning last year. In addition to that, those students were able to cooperate with the community in the learning. The students asked them how to read books for children.

Students were satisfied with the nursing experience learning in home economics. They could understand more about children and the role of parents. Next, they need to learn that raising children should be taken care by both men and women, and society.

I. 問題の所在

本研究の目的は、筆者が2016年11月に行われた第54回中国・四国地区中学校技術・家庭科研究大会、第55回高知県中学校技術・家庭科研究大会 第5分科会 家庭分野（内容A 家族・家庭と子どもの成長）で保育に関する指導助言を担当させて頂いた経緯から、日本の子育て環境の課題をふまえて、家庭科における中学生の幼児触れ合い体験学習を今後どのように発展していけばよいのかを検討することである。

II. 中学校学習指導要領解説にみる家庭科の保育

ここでは、中学校学習指導要領解説技術・家庭編を引用しながら、中学校家庭科の保育の指導内容と指導方法について整理する。

学習指導要領では、中学校家庭科における家庭分野の目標は、「衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる」である（文部科学省、2008）¹。

この中で幼児触れ合い体験学習は、全ての中学生に履修させる内容としての「A家族・家庭と子どもの成長」、「B食生活と自立」、「C衣生活・住生活と自立」、「D身近な消費生活と環境」のA（家族・家庭と子どもの成長）を構成する3要素の1つ（①「自分の成長と家族」、②「家庭と家族関係」、③「幼児の生活と家族」）に組み込まれている。

そして学習指導要領において「幼児の生活と家族」は、生徒に次の事項を指導することが指示されている。

- ア) 幼児の発達と生活の特徴を知り、子どもが育つ環境としての家族の役割について理解すること。
- イ) 幼児の観察や遊び道具の製作などの活動を通して、幼児の遊びの意義について理解すること。
- ウ) 幼児と触れ合うなどの活動を通して、幼児への関心を深め、かかわり方を工夫できること。
- エ) 家族又は幼児の生活に関心をもち、課題をもって家族関係又は幼児の生活について工夫し、計画を立てて実践できること。

例えばア)では、「幼児の心身の発達の特徴とそれを支える生活について知るとともに、幼児期における周囲の人との基本的な信頼関係や生活習慣の形成の重要性について考えることを通して、幼児にふさわしい生活を整える家族の役割について理解できるようにする」ことが示されている。また学習指導要領は、幼児の身体の発育や運動の機能、言語、情緒、社会性等の発達の概要とそれを支える生活の重要性（ただし心身の発達には個人差がある）、家庭生活の中で親やそれに代わる人が愛情をもって幼児と接

することによる、幼児との基本的な信頼関係の形成の重要性、そして幼児の基本的な生活習慣（食事、睡眠、排泄、着脱衣、清潔等）のために、親をはじめ周囲の大人が適切にかかわることの重要性を示し、家族には、幼児にふさわしい生活を整える役割があることを生徒に考えさせるよう指示している。

イ)では、「幼児の遊びを観察したり、一緒に遊んだり、遊び道具を製作したりするなどの実践的・体験的な学習活動を通して、幼児の遊びについて考えさせ、幼児にとっての遊びのもつ意義について理解できるようにする」ことが示されている。ここで学習指導要領は、幼児にとっての遊びは、心身の発達や社会性の獲得等の発達を促すことと、幼児が室内のみならず戸外で友達と遊ぶことの重要性、そして幼児の発達段階や子どもの個性によって、遊びの種類と遊び方、他者とのかかわりが異なることを生徒に理解させる、としている。なお遊び道具は、子どもの成長やコミュニケーションを促す上で大切であることを生徒に理解させた上で、安全性に配慮した遊び道具の制作と遊び環境の確保を指示する。さらに遊び道具について、生徒には市販品（玩具・遊具・絵本等）のみならず、自然の素材、身の回りのもの、言葉や身体を用いたものもあると提示した上で、伝承遊びのよさへの気づきも促している。そして教員には、具体的な活動を通して、生徒が幼児の遊びについて考えられるような配慮を指示している。

ウ)では、「幼児と触れ合う活動などの直接的な体験を通して、幼児への関心を深めるとともに、幼児とのかかわり方を工夫できるようにすること」や「生徒が自分なりの課題をもって、幼児の発達に応じたかかわり方を工夫し実践できること」を掲げている。学習指導要領は、生徒が幼児の発達やその時々幼児の状況に応じて、自分なりに考えて幼児と接する中で（特に態度や声掛け、遊び方等）、生徒が幼児に積極的に関心をもち、幼児との触れ合いを肯定的に捉えられることを促している。そして学習指導要領は、生徒たちが幼児をより理解するために、幼児との触れ合い体験を振り返る活動を提案している。なお教員は、生徒ができるだけ幼児と直接的な体験ができるように、幼稚園や保育園以外に地域の子育て支援センターや育児サークル等での触れ合いも提案しているが、直接的に幼児とのかかわりや観察が難しい場合には、視聴覚教材の活用、ロールプレイングなどの学習活動も手段のひとつとして紹介している。

エ)では、「自分の家族又は幼児の生活に関心をもち、課題を見いだし、それを改善する工夫を考えたり、自分の家族又は幼児の生活をさらに豊かにするための工夫を考えたりするなど、これからの生活を展望して、課題をもって家族又は幼児の生活をよりよくしようとする意欲と態度を育てる」としている。そして生徒には、幼児とかかわ

る中で気づいた課題から、幼児の生活に役立つものを作ったり（遊び道具の制作や間食づくり等）、適切にかかわったりするための計画力と行動力が求められている。その際、教員にはPDC Aサイクルを基に、グループ学習を中心とした問題解決的学習を進めるよう指導がなされている。

Ⅲ. 家庭科における幼児との触れ合いの重要性

伊藤葉子は、中高生が家庭科で幼児と触れ合うことの意義を、まず「小さい子について知る」と「自分を知る」ことだとし、中高生はそれらの獲得により、子どもに対する社会的自己有効感が高まる結果、中高生の、他者との関係性における姿勢が、意欲的なものへと発展するという。そして伊藤は、中高生のこのような変化（成長）は、かれらの「今、現在、他の人に対する受容性と思いやりを備えた個人であるための資質の育成」であり、それはまさに、家庭科が中高生につけさせたい力である、幼児と触れ合う学びの目標としての「親性準備性の獲得」だという。よって伊藤は、昨今の少子化問題の中で、家庭科における保育が出生率向上のために期待されているが、中高生が幼児と触れ合うことの意義は、決して（生徒に）親になる生き方を人間としてあるべき生き方として刷り込むことではないと述べている（伊藤，2005）ⁱⁱ。

社会科学の視点から子育て支援に関する研究業績を多くもつ中谷奈津子も、家庭科における生徒の「親性準備性」の獲得を重要な課題としている。昨今の児童虐待等、子どもが家庭内で親から被害を受ける深刻な問題を解決していくために、中谷は、親が親になってからの社会関係・環境の調整はもちろん重要としたうえで、親が親になる前の「親性準備性」の獲得が欠かせないとする。そして親が親になる前の「親性準備性」の獲得には、親になる前の「育児経験」や「子どもと関わった経験」を積むことが必要であり、そのために家庭科で生徒が幼児と関わる機会（保育体験）が果たす役割は大きいという（中谷，2016）ⁱⁱⁱ。

中谷は、先行研究から、「親性準備性」の獲得に向けて、小・中・高生が保育体験によって得られる効果を5点にまとめた。それらは「①肯定的な情動的経験と意欲的な学び」「②子どもへの関心と発達理解」「③幼児イメージの変化」「④自己理解の深化と内面的成長の促進」「⑤『子どもを育てる存在』としての成長促進」である。

中谷によれば、①は主に、生徒が幼児との交流を通して、楽しかったり嬉しかったりした気持ちをもつことや、交流をきっかけに、保育の座学の授業に対して積極的に取り組む姿勢を示す。②は主に、（交流をきっかけに）幼児に対して関心をもつようになることや、幼児の発達の多様性（個人差がある）の理解、そして子どもの主体的な意見を尊重すること等への理解である。③はかれらの幼児に対する否定的なイメージ（汚い、うるさい等）が、肯定的（た

くましい、面白い、かわいい）に変化することを指す。④は保育体験を通じて、子どもたちが、誰かの役に立つことに喜びを感じることによる自尊感情や自己効力感の向上、自分自身の生き方を省みる機会の獲得（自己省察）、相手の立場に立って物事を考え、どう行動すればよいかを考えられるようになること（他者理解、共感的応答性の獲得）を指す。そして⑤は「子どもを育てること」に対する意識の変化（子どもを育てることは難しい、むなしいといった気持ちの変容）、「いつか育てる存在になる」自己の認識（将来、育てる自分を想像する）、「社会全体で子どもを育てる意識」の醸成（子育ては親だけではできない、男女で、社会でかかわるべき、という意識をもつようになる）等を意味する。

Ⅳ. 大会における研究の概要

ここでは、第54回中国・四国地区中学校技術・家庭科研究大会、第55回高知県中学校技術・家庭科研究大会 第5分科会 家庭分野（内容A 家族・家庭と子どもの成長）の大会要録を引用し、「幼児触れ合い体験を通して自ら進んで幼児とかかわろうとする生徒の育成」（鳥取県中学校技術・家庭科研究会、提案発表者 齋木由紀先生）の研究目的・方法・成果と課題（齋木，2016）^{iv}を整理した。

(1) 目的

研究の最重要課題は、「中学生が幼児触れ合い体験を通して、自分自身と人のかかわり方を見つめ直すとともに、自ら進んで幼児とかかわろうとする生徒の育成を目指すこと」である。

(2) 方法

<指導内容>

指導内容は1学年で「①自分の成長と家族（ガイダンス）」（5時間）、2学年で「②自分の成長と家族」「③心と体の発達」（8時間）とした後、3学年で「④幼児との生活と遊び」（2時間）、「⑤幼児との触れ合いについて」（3時間）、「⑥幼児触れ合い体験学習」（2時間）、「⑦幼児触れ合い体験学習事後学習」（2時間）であった。

<授業の方針>

②から⑤（基本題材）について試みた学習方法は、「先輩たちの体験記録を活用」「絵本の読み聞かせの方法の習得」「幼児触れ合い体験学習の目標設定の工夫」である。

「先輩たちの体験記録を活用」では、生徒たちは、先輩たちの幼児との触れ合い体験を知り、グループで意見交換をしている。そして先輩たちが幼児との触れ合い体験をした際に、実際にどのようなことに困り、どう対処したのかという記述を確認した後で、自分たちならばどのように対応するのかを、全体で確認するという学習方法をとっていた。

「絵本の読み聞かせの方法の習得」について、教員は、生徒たちが子どもと親しくなるためにこの方法を選択し

ただだけでなく、幼児の発達段階に合わせた絵本を、生徒自らが考えて選ぶように指示していた。さらに生徒は、読み聞かせにおいて工夫する点を、地域で読み聞かせを行っているボランティアから学んだ後、個人練習およびペア練習を行った。

「幼児触れ合い体験学習の目標設定の工夫」では、教師は生徒に、幼児心身の発達に合わせたかかわり方を具体的に考えて実践するよう指導を行っていた。その結果、生徒は幼児の年齢ごとにかかわり方を考え、目標を設定していた(例:3歳は、自分の意思で行動できるようになるので、あまり指示はしない。4歳は、上から見下ろされると恐怖心を持つので、目の高さをあわせ、やさしく話しかける、5歳は目的にあった話ができるので、好きなものなどを聞き会話をする等)。

⑥から⑦(応用題材)について試みた学習方法は、「学びの共有で深めるワークシートの工夫」「専門家によるアドバイス」であった。

「学びの共有で深めるワークシートの工夫」では、教員は、この授業によって生徒の思考がどう変わったのかが分かるワークシートを提供していた。このワークシートは、生徒が幼児とのかかわりをどのように工夫したのか、なぜそのような考えをもち、そのような工夫をしたのか等、思考プロセスが見えるような構成となっていた。

「専門家によるアドバイス」では、幼児触れ合い体験学習を振り返る際、教員は、生徒だけで話し合っても解決に限界が見えた事項に関して、保育所の先生から指導を受ける方策をとっていた。例えば生徒たちは、「5歳児とかかわった生徒がおにごっこをしていた際に、おにが増えて誰がおにか分からなくなったことから、自分たちはどうかかわれば良かったのか」を振り返っていた。そしてかれらが話し合った結論では「おにに目印をつけること」であった。そして保育園の先生からは、その方策も間違っていないという助言を受け、さらに「5歳はルールを守れる発達段階であることから、遊ぶ最初または遊びの途中でおにを確認する」というアドバイスも受けていた。

(3) 結果と今後の課題・展望

研究の成果として、本大会の提案発表者と要録が示す多数の点を、筆者は主に以下3点にまとめた。

第1に、幼児とのかかわりに関する事前学習の有効性である。提案発表でも明確にされていたが、要録でも、教員が幼児の発達段階を意識し、実際の場面を想定した学習を多く取り入れたことで、(生徒が)幼児触れ合い体験学習で工夫して実践しようとする姿が見られていたことが分かる。また要録では、(生徒は)「事後の振り返りの記述では、自分が担当した幼児について、発達段階に応じたかかわり方の工夫を具体的に記述した上で、そのかかわり方の評価を適切に行うことができていた」ことも研究成果とし

て評価していた。

第2に、生徒同士での話し合いによる学びの深まりである。提案発表および要録では「生徒同士でお互いの評価を共有することで、(生徒が)それまで気づかなかった視点を持てたり、自分自身の(幼児との)かかわり方について深く考えたりすることにつながり、幼児とのかかわり方の理解を深めることができた」と述べられていた。

第3に、幼児触れ合い体験学習によって、幼児を肯定的にとらえる生徒の大幅な増加である。提案発表および要録によれば、生徒に対する直前アンケートにおいて、「幼児との話し方や接し方がうまく(幼児を不安がらせず)かかわれますか?」に対する回答の割合は、「うまくかかわれると思う」が直前アンケートでは32%であったが、事後アンケートでは64%となっており、「どちらかといえばうまくかかわれると思う」も合わせると、その数値は直前69%から事後94%に上昇していた。

今後の課題としては、生徒がその後、「普段の生活でも自ら進んで幼児とかかわろうとすることができるのか」が挙げられ、今後の展望では、「幼児の個性や気持ちに寄り添って活動した経験が、生徒の日々の生活の中で家族、友だち、地域の人々とのよりよいかかわりへとつながっていくことにも触れていきたい」とまとめられていた。

V. 大会の研究の評価

ここでは本大会の研究の成果を、新たに筆者の視点から別途、以下にまとめた。

第1に、幼児と触れ合い体験において、直接体験と間接体験の相乗効果を用いて学習効果を高めただけでなく、生徒の体験前の不安を解消したことである。

確かに柴らの研究では、赤ちゃん人形を利用した疑似体験学習は、(生徒が)小さきものに対するいとおしさやかわいく思う気持ちの醸成に寄与したと評価する一方で、直接体験学習と同等の効果には至らなかったという(柴他, 2005) v。しかし疑似体験学習を今回のような実際の体験学習と組み合わせることで、生徒たちは幼児への理解や幼児に対する積極的なかかわりを見せるのではないだろうか。実際に本研究では、教員が先輩の記録を使ったり、地域の読み聞かせボランティアからの指導を受けて生徒同士で練習したりといった直接体験学習を多く取り入れたことで、生徒の幼児への理解やかかわりに対する態度に積極性が見られていた。

またこのような学習方法は、生徒がもっている、幼児とかかわることに対するいくらかの不安や緊張を解く効果もあったと言えるだろう。上述した柴らの先行研究でも、中学生は幼児との触れ合い体験学習に際して、特にコミュニケーションの取り方(どのようにことばを交わすと幼児に受け入れられるのか)に戸惑いがちであったが、事前に

行ったことばの学習で、その不安が軽減されただけでなく、生徒は（この学びは）まわりの人との交流にもつながると評価したという（柴他，2005）^{vii}。実際に幼児とかがかわったことのない生徒もいる中で、先輩の話から学んだり読み聞かせの指導を受けたりしたことで、生徒は実際に幼児とかがかわる際にどのようなことを知るべきかを事前にイメージできたり、漠然とした不安が解消されたりしたのではないだろうか。

第2に、疑似体験学習や事後の振り返りの学習において、生徒が教員以外の大人の力を借りて学習を遂行したことにより、この学びが中学生と幼児のかがわりのみならず、地域の人々とかがわる経験にもつながったことである。上述したように学習指導要領では、幼児との触れ合い体験の実施においては、地域の子育て支援センターや育児サークルの親子との触れ合い等も提案しているが（文部科学省，2008）^{viii}、本大会の研究において、地域で活動している方の力も借り、幼児との触れ合い体験の学びの場を学校と保育園だけで完結させず、中学生が地域の大人とかがわる試みを行ったことは評価できるのではないだろうか。

第3に、生徒が自分の思考と成長に気づく指導が進められていたことである。生徒は班で話し合う時間だけでなく、個人で考える時間をもつことができていた。また個人で学習する時間の中で、ワークシートは生徒に幼児のかがわりについて、知識として何を知り、何を考えたのか、どのような課題を抱え、それをどう対応したらよいかを自分で考える機会を提供していたと言えよう。このことで、生徒は自身の成長の変化に気づくことが可能になっていたのではないだろうか。

また、本大会の成果の課題として掲げられた「幼児との触れ合い体験学習が家族や友達とのよりよいかかわりへとつながるのか」に対しては、肯定的な期待をもってもよいのではないだろうか。先行研究では、高校生の事例にはなるものの、保育体験学習をした後で、生徒が教員の忙しさに気遣う態度をとる等、生徒の周囲への態度が変容したという記述が見られている（杉本，2005）^{ix}。本大会の研究は、中学生が幼児のみならず、身近な大人とのかがわりを学ぶ機会の提供としても、効果があったのではないだろうか。

VI. 中学生の幼児触れ合い体験の学びの今後

(1) 子育てを社会全体で担うことに目をむける学び

本大会の研究では、中谷が整理した、保育体験における効果の⑤「子どもを育てる存在」としての成長促進は、その他（①から④まで）と比べてあまり見出されていない項目であった。確かに⑤は、学習指導要領をふまれば、高等学校の家庭科の保育の学習で獲得すべき事項と位置づけられるかもしれない。

しかしながら、現状では、実際に高等学校で幼児触れ合い体験を一度も経験しないまま、つまり⑤について深く学ぶ機会をもてないまま、親になる生徒も存在する。もっとも家庭科における幼児との触れ合い体験は、全ての中学生が経験するものでないばかりか、高校生ではそれを経験する割合が激減する。2004年と2005年に注目した先行研究では、家庭科でふれあい体験を実施する中学校は、必修科目での実施でも50%台後半であり、高等学校では5%程度と報告されている（伊藤，2007）^{ix}。同じく2010年代までの調査を概観した中谷の研究では、幼児との触れ合い体験の実施は、中学で半数程度であり、高校では必修よりも希望に基づく体験のため、全ての生徒が保育体験をしていないことが報告されている（中谷，2016）^x。幼児との触れ合い体験の学習は、幼児への理解や他者とのかがわり等、生徒に様々な効果をもたらすにもかかわらず、幼児との触れ合い体験を通して保育について学ぶ中学生は全体の半数程度であり、高校生ではもっと少ない。

このようなことを考えると、少なくとも幼児との触れ合い体験を学んだ中学生が、授業において、中谷が指摘した「子どもを育てる存在」としての成長促進について、何らかのかたちで考える機会も必要ではないだろうか。何もそれは単に、中学生が今の段階で親となった自分を意識することではない。重要なことは、中学生が、今回の体験から、（かつては世話をされる側だった自分が）社会の一員として子育てにかかわれたという気づきをもって、子育ては、社会的規範が当然視するような、親だけの責任ではないという問題意識をもつことではないだろうか。

中学校の家庭科の家族・家庭の分野では、中学生が、自分の成長には家族のみならず、地域の人々等、多くの大人がかがわってきたことを理解する機会がある。そこで（幼児との触れ合い学習の振り返りの際には）中学生が、自分たちが幼児の成長にかかわるメンバーの1人になりえたことを通して、子育ては親だけがかがわるものではないことに気づくことは、将来的には、子どもを社会全体で育てる世論の形成にもつながるであろう。

(2) 男女ともに子育てにかかわることを考える

またこれは本大会の研究で特に重点は置かれていなかったが、中学生にも対しても、幼児との触れ合い体験の学びの中で、「子育ては母親だけの仕事なのか」という問いかけをすることも必要ではないだろうか。

確かに中学校の家庭科の学習指導要領では、このような学びについて詳しくは指摘されていない。しかし家庭科の男女共修化が進み、家庭における男女共同参画を学ぶ機会は提供されているにもかかわらず、現実には、既に高校生の段階で、子育てを母親の責任、あるいは母親が主体的に子育てをするべきだと思っている生徒が存在している。例えば関西圏の自治体の調査では、将来、子どもを育てたい

（「育てたい」「どちらかといえば育てたい」の合計）と考
えている高校生の割合は約7割であるものの、実際の家事
や子育ての役割分担については、全体の14.4%が「女性が
した方がよい」「どちらかといえば女性がした方がよい」
と考え、性別役割分業に賛成する意向を見せている（牧方
市子育て支援室，2014）^{xi}。また関東圏の調査では、将来
の家事や育児の分担について、「夫と妻が同じくらい」と
考える割合は約半数（男子50.3%、女子42.9%と男子の割
合の方が高い）であったが、「妻が中心」（と行って行く）
と答えた高校生は、男子37.8%、女子45.7%であり、この
数値は決して無視できない（木村，2009）^{xii}。

また実際に、日本では共働き世帯が主流となっているが、
子どものいる共働き世帯の夫・妻の家事関連時間（週全体）
は、妻4時間53分に対して夫39分でしかない（総務省，
2012）^{xiii}。よって日本は他の先進諸国と比べても、家庭に
おける男女共同参画の進展が極めて遅い状況にあると言
わざるをえない。働く女性が増加する中で、家庭における
家事・育児・介護等が、いまだに働く女性の肩に多くのし
かかっている。

このような社会的背景を踏まえると、中学生が保育をき
っかけとして、家庭責任とジェンダーについて学ぶ機会には必
要ないと言えようか。中学生の段階においても、保育の体
験を通して、子育てに対して男女が協力することや、子育
ては母親の役割なのかを話し合う機会をもち、育児の社会
的規範を考え、母親に対する育児の重圧を取り上げる学習
があってもよいのではないだろうか。

例えば中学校の教科書でも、諸外国の子育ての事例を伝
え、父親の子育てについて考える授業などもあってもよい
だろう。このような教材と保育体験を踏まえて、男女とも
に子育てにかかわることへの理解を深める学習も必要で
はないだろうか。またそのような「教材」は、教科書以外
でも新聞やニュースでも簡単に入手できるはずである。

（3）積極的にかかわれない生徒への対応

本大会では、特にこの授業を「積極的になれない」「楽
しめない」「つまらない」と評価した生徒は居なかった。
しかし全国の学校でも同じになるとは限らない。

そのような生徒がいた場合、例えば生い立ちや家族環境
を話したくないと感じている生徒がいないかを確認する
必要はあるだろう。実際にそのことは本大会の研究協議の
中でも指摘され、意見交換がなされた。生徒が望まない個
人情報やプライバシーを侵害する学習方法はもちろん実
施すべきではない。中谷も、現在は家族形態が多様化して
いるため、自分の幼少期を積極的に思い出したくない子ど
もたちもいるはずだと指摘している（中谷，2016）^{xiv}。

最後に、幼児との触れ合い体験には様々な効果があるが、
授業との兼ね合いや実施の日程調整等、様々な壁があるこ
とも事実である。しかし、このようなことを学習した中学

生は、幼児触れ合い体験を通して、幼児という現在の自分
とは異なる発達段階の他者と真剣に向き合い、相手を理解
することを学んだだけでなく、自分にも向き合い、保育園
の先生や地域のボランティアといった大人とかわる体験
もできていた。

中学生が今回の体験で獲得した「親性準備性」を、日々
の生活の中で少しずつ増やしていくことが、子育ての責任
を家庭の“自己責任”として突き放すのではなく、子どもを
社会全体で育てる社会の醸成につながるだろう。そのよう
な社会を創ることこそが、子育てにやさしい社会の実現で
あり、家庭科が目指す目標のひとつでもある。

なお昨今では、少子化問題を背景に、政府が家族の在り
方や家庭教育に提言しつつあるが、家庭科における幼児触
れ合い体験は、将来を担う生徒たちに子どもをもつことや
親（特に母親）としての責任を強制するものでは決してな
いことを、再度確認しておきたい。

【参考文献】

- i 文部科学省，2008，『中学校学習指導要領解説技術・家庭編』。
- ii 伊藤葉子，2005，「中・高生の『親性（おやせい）』を育む」，日本幼稚園協会『幼児の教育』104（5），18-25。
- iii 中谷奈津子，2016，「親性準備性に向けた『保育体験』における効果：文献レビューからみる小・中・高家庭科教育」，『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』64，37-49。
- iv 鳥取県中学校技術・家庭科研究会・斎木由紀先生，「幼児触れ合い体験を通して自ら進んで幼児とかわるうとする生徒の育成」，『第54回中国・四国地区中学校技術・家庭科研究大会，第55回高知県中学校技術・家庭科研究大会 高知大会要録』第5分科会 家庭分野（内容A 家族・家庭と子どもの成長），57-60。
- v 柴静子・一ノ瀬孝恵・日浦美智代・藤井志保・鈴木明子，2005，「家庭科の保育領域におけるふれ合い体験学習の効果に関する研究」，『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』33，369-379。
- vi vと同じ
- vii iと同じ
- viii 杉本志穂，2005，「家庭科における保育体験学習—附高あそぼうDAY—」，『大阪教育大学附属高等学校池田校舎 研究紀要』39，59-63。
- ix 伊藤葉子，2007，「中・高生者の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討」，『日本家政学会誌』58（6），315-326。
- x iiiと同じ
- xi 枚方市子育て支援室，2014，『高校生の子育てに関する意識調査結果』，<https://www.city.hirakata.osaka.jp/uploaded/attachme nt/46730.pdf>。
- xii 木村治生，2009，「性別役割分業に対する意識変化の要因を探る・都立高校生調査を手がかりにして」，ベネッセ教育総合研究所『都立高校生の生活・行動・意識に関する調査報告書』
<http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/toritsu>

[kousei/2009/pdf/data_15.pdf](#).

xiii 総務省統計局, 2012, 『平成 23 年社会生活基本調査』
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou2.pdf>.

xiv iiiと同じ